

福井県あわら市のアクセント分布*

松倉 昂平

キーワード: N型アクセント 3型アクセント 2型アクセント 三国式
方言地理学 福井県あわら市方言 北潟方言

要旨

今日に至るまで詳細なアクセント調査がなされずその分布・体系詳細が明らかにされていないなかった福井県あわら市は、ほぼ全域が明瞭なN型アクセントの分布域であることを臨地調査により確認した。南部を中心とした市内の広い範囲には従来三国式として知られてきた二型アクセントが、北部には互いに音声実質が大きく異なる3種類の三型アクセントが分布する。同市北部に位置する北潟湖周辺は、多様なN型に加え隣接する石川県加賀地方のアクセントと類似する多型アクセントも分布し、特にアクセントの地域差が著しい。本稿では、同市に確認された多様なアクセント体系の概要と分布状況を報告する。

1. はじめに —地理的概要と調査方法—

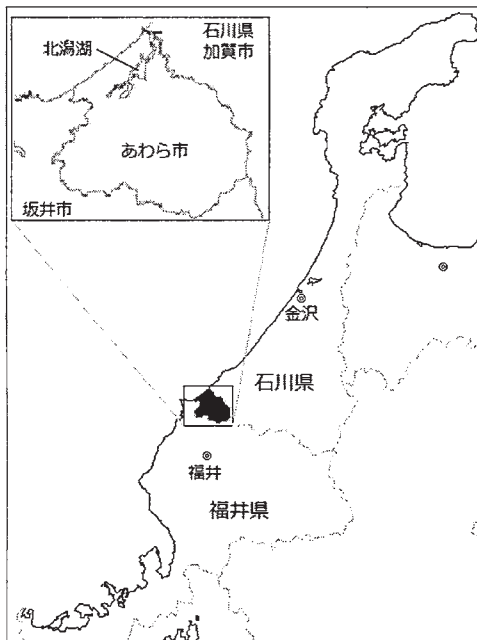


図1 福井県あわら市の位置

福井県あわら市は福井県の最北端に位置し、2004年3月に坂井郡^{あわら}芦原町と同郡^{かみづ}金津町が合併して誕生した面積117km²・人口およそ29,000人(2014年7月推計)の市である。地形上は大きく2地域に分けられ、北部は穏やかな丘陵地形に森林・畑地が広がり、南部は福井平野の北端にあたり平地に水田が広がる光景がみられる。

筆者は、2013年7～9月と2014年2～3月にかけて、市内13地点で1921年～1953年生の地元生え抜きの話者17名に対し面接による調査票の読み上げ調査を実施した。面接1回あたりの実質調査時間は1～2時間、調査回数は北潟地区が4名に対し計8回、赤尾、滝、浜坂、細呂木、御簾尾、吉崎各地区が1名に対し計2回、清滝、熊坂

* 調査に快くご協力いただいた話者の皆様、ならびに、協力者の方々をご紹介いただいたあわら市教育委員会文化学習課の皆様には厚くお礼申し上げます。また本稿に係る調査にあたっては国語研プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」の支援をいただいた。

各地区が2名に対し1回ずつ、伊井、波松、蓮ヶ浦各^{はすがうら}地区が1名に対し1回である。

本稿では、上記調査の結果に基づき、同市内に確認された各体系の概要を報告する。体系の詳細・通時的議論には深く立ち入らず、市内全域の分布を示し多様な体系を比較することを主なねらいとする。

2. 先行研究

初めて同市を含む福井県嶺北地方全体のアクセント分布を明らかにした平山(1953)によれば、現あわら市内では現あわら市波松、滝、牛ノ谷、伊井の各地点に平山の呼ぶところの「特殊音調¹」が分布している。また金田一(1975: 234-235)には、同市の西に隣接する旧坂井郡三国町(現坂井市三国町)方言のアクセントに言及がある²。しかし一方で、山口(1999,2000)によれば、同市は無アクセント地帯に含まれると結論付けられている。市内各地で収録された高年層から若年層に及ぶ多くの話者による調査票の読み上げからははっきりとしたアクセントの対立は聴かれなかったという³。果たして同市は本当に全域が無アクセント地帯なのか、平山(1953)に報告される「特殊音調」とは何だったのか、もしそれが存在するならばどんな姿なのか、長らく明らかにされないままであった。

3. 分布

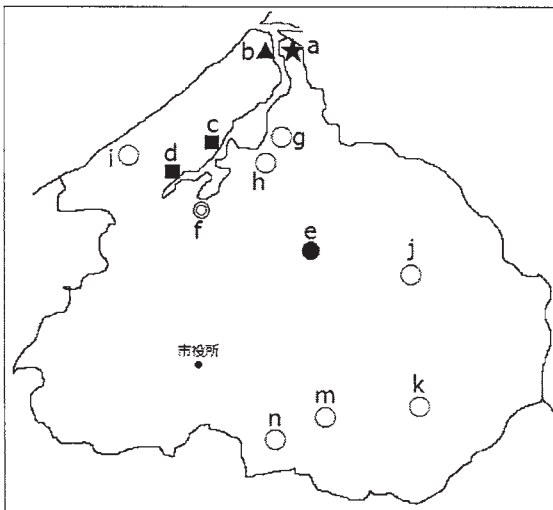


図2 あわら市のアクセント分布

まず左図2に全調査地点の位置と各地点で確認された体系を示す。凡例は以下の通り。

★…吉崎式(多型)

分布: a.吉崎

▲…浜坂三型

分布: b.浜坂

■…北潟三型

分布: c.北潟東、d.北潟西

●…滝三型

分布: e.滝

¹ 平山(1953)によれば、現あわら市を含む福井平野周辺に分布する体系。旧坂井郡伊井村伊井(現あわら市伊井)方言が例として挙げられており、2拍名詞1類[ウシ・[ウシガ、2・3類イシガ(イシガ)、イケガ(イケガ)、4類[アト・[アトガ(アトガ)、5類[アキ・アキガ、のようになるという。「特殊音調」の具体的な音声実現についての言及はこれが唯一である。

² 2拍名詞については、牛、風、海、空、秋、雨など1,4,5類が[○]○・[○○]ガ、紙、川、足、山など2,3類が○[○]・○[○]ガ、のようになるという。他、1~3拍の名詞、動詞・形容詞(終止形)の音調が示された。

³ 現あわら市内の話者については、実際に話者と対面し調査票読み上げの録音を行ったのは学生で、山口は録音の聴き取りを担当した。

◎…赤尾二型

分布：f.赤尾

○…主流二型

分布：g.細呂木、h.蓮ヶ浦、i.波松、j.熊坂、k.清滝、m.御簾尾、n.伊井

白塗りの記号が二型、黒塗りが三型または多型の地点である。二型は北部から南部まで市全体に分布しているが、三型は北部にしか確認されていない。同市最北端の吉崎地区に分布する多型アクセント以外は、すべてN型アクセントである。

4. 体系概要

4.1 吉崎式（分布：a. 吉崎）

調査語数が依然少ないため不明の点も多いものの、拍数⁴が増えるほど区別される型の数が増える多型アクセントであることは確実である。表1に名詞のアクセント型を一覧する。

表1 吉崎方言の名詞のアクセント型

	1 拍語	2 拍語	3 拍語	4 拍語
無核	[エ、[エガ (絵)	ア[メ、ア[メガ (雨)	ネ[ズミ	ニ[ワトリ
1 核	[カ]]、[カ]ガ (蚊)	[ハ]シ、[ハ]シガ (橋) [ハ]ナ、[ハ]ナガ (花)	[ナ]ミダ	[カ]ミナリ
2 核		[アメ、[アメ]ガ (飴)	[タタ]ミ	ア[サ]ガオ
3 核			未見	オ[トト]イ
4 核				未見

2 拍名詞の類別体系⁵は、母音の広狭の影響を受け、1 類のうち 2 拍目の母音が狭母音である語と 2,3 類は 1 核、1 類のうち 2 拍目の母音が広母音である語は 2 核、4,5 類は無核とみられる。ただし 1 核語のうち 2 拍目が広母音の拍である語は助詞が接続した環境でピッチの下降が 2 拍目の後に後退し 2 核語との対立を失う。

4.2 種類の三型アクセント（分布：b. 浜坂、c. 北潟東、d. 北潟西、e. 滝）

同市内に確認された三型アクセントは、音声実質の違いにより大きく 3 種類に分けられる。本稿では、浜坂地区に分布する体系を「浜坂三型」、北潟地区⁶に分布する体系を「北潟三型」、

⁴ 本稿における「拍」はモーラに相当する。

⁵ 本稿では、各類の所属語彙は金田一(1974: 62-73)を参照。

⁶ あわら市大字北潟の中で、北潟湖沿いの集落の下流側（北東側）が北潟東地区、上流側（南西側）が北潟西地区と呼称される。両地区のアクセント体系はほぼ同質であるとみられるが、本稿では北潟西地区での調査結果を基にして北潟三型の記述を行う。

滝地区に分布するものを「滝三型」と呼称する。後述の通り滝三型は新田(2012)に報告される福井県越前町こひらぎ小樟方言の三型アクセントと非常に類似する体系である。

4.2.1 各体系のアクセント型

まず各三型の言い切り形のアクセント型を対照する。3つの型に割り振る呼称は新田(2012)に倣いA,B,Cとした。各方言とも、各型への所属語類⁷は小樟方言とほぼ一致する。

表 2 三型諸体系の言い切り形のアクセント型

浜坂	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍
A	[○]]	[○]○	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○
B	[○	[○○	[○○○	[○○○○	[○○○○○
C	[○]]	[○]○	[○○]○	[○○○]○	[○○○○]○
北潟					
A	[○]]	[○]○	[○○]○	[○○○]○	[○○○○]○
B	[[○	○[○	○○[○	○○○[○	○○○○[○
C	[○	[○○	[○○○	[○○○○	[○○○○○
滝					
A	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○
B	[○	○[○	○[○○	○[○○○	○[○○○○
C	[○]]	[○]○	○[○]○~	○[○]○○~	○[○]○○○~
			[○]○○	[○○]○○	[○○]○○○

* 浜坂方言の3拍以上の文節の語頭拍は低く実現することもある。

浜坂三型の各型はピッチの下降の有無と下降の位置によって対立する。3拍まではA型とC型の間で音声上の区別が現れないものの4拍以上においては下降位置に違いが見え、A型は語頭から数えて2拍目の後に下降が生じる一方C型は文節末（語末）から数えて2拍目の後に下降が生じる。なお4拍以上のA型は音声上は[○○!○○(HHMM)・[○○!○○○(HHMML)のように2拍目以降全体を通してゆるやかに下降する実現となる。

北潟三型の各型はピッチの下降の有無と上昇の位置によって対立する。A型は次末拍の直後に下降が生じ、逆にB型は次末拍の直後に上昇が生じる音調である。C型は文節末（語末）まで大きな下降も上昇も生じない平板調となる。

滝三型の各型は浜坂三型と同様にピッチの下降の有無と下降の位置によって対立する。B型でピッチの下降が生じずA,C型で下降が生じることは浜坂三型と共通しており、特に3拍以内の文節（語）の音声実現は非常に類似する所が多い。4拍以上においては、A型は2拍目から

⁷ およそ1拍名詞：1A/2B/3C、2拍名詞：1A/2,3B/4,5C、3拍名詞：1,4A/5B/6,7C

次末拍まで高い拍が続きその直後に大きな下降が生じる音調であり、C型は語頭から数えて1,2拍目を高さのピークに文節末（語末）にかけてゆるやかに下降が生じる音調である。表3に挙げる通り、各型の音声特徴は越前町小樟方言のそれと酷似することがわかる。

表3 越前町小樟方言のアクセント型（新田2012: 66より）

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍
A	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○
B	[○	○[○	○[○○	○[○○○	○[○○○○
C	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○]○○	○[○]○○○ ⁸

次に、各方言の「2拍名詞+助詞+アル/イル」の音調を挙げる。助詞を添加した文節の音調、また文単位で見た各型の実現を見る。

表4 浜坂・北潟・滝三型の「2拍名詞+助詞+アル」の音調

浜坂	2拍	2拍+1拍	2拍+2拍	2拍+3拍
A	[ハ]コ。	[ハコ]ガアル。	ハ[コ]ナラアル。	ハ[コ]ニナラアル。
B	[ヤマ。	[ヤマガ]アル ⁹ 。	[ヤマナラ]アル ⁹ 。	[ヤマニナラ]アル ⁹ 。
C	[マ]ド。	[マド]ガアル。	マ[ドナ]ラアル。	マ[ドニナ]ラアル。
北潟				
A	[ハ]コ。	[ハコ]ガアル。	[ハコナ]ラアル。	[ハコニナ]ラアル。
B	ヤ[マ。	ヤマガ[アル。	ヤマナラ[アル。	ヤマニナラ[アル。
C	[マ]ド。	[マド]ガアル。	[マドナ]ラアル。	[マドニナ]ラアル。
滝				
A	[ハ]コ。	ハ[コ]ガアル。	ハ[コナ]ラアル。	ハ[コニナ]ラアル。
B	ヤ[マ。	ヤ[マガ]アル ⁹ 。	ヤ[マナラ]アル ⁹ 。	ヤ[マニナラ]アル ⁹ 。
C	[マ]ド。	マ[ド]ガアル。	マ[ド]ナラアル。	マ[ド]ニナラアル。
	[ア]ユ。	[ア]ユガイル。	[アユ]ナライル。	[アユ]ニナラアル。

浜坂・滝両三型ではどの型の名詞節も同じ拍数の単語単独言い切り形と同じ音調を取る。一方北潟三型では、B型に言い切り形と接続形の区別がありそれぞれ若干異なる音調を取る。

(1) 北潟三型の言い切り形と接続形

A型：[ハコカ]ラ。 = [ハコカ]ラ デル。

B型：ヤマカ[ラ。 ≠ ヤマカラ [デル。

⁸ 小樟方言のC型の実現を正確に表記すれば、5拍の場合○[○!○!○!○!○!○]○のように2拍目を高さのピークにその後ゆるやかに下降する音調である（新田2012: 67）。

⁹ [ヤマガ アル。～ヤ[マガ アル。のように文末まで全く下降のない音調も可。

C型：[マドカ^レ。 = [マドカ^ラ デ]ル。

ただし、動詞等が後続する環境にあっても、間に休止が置かれる発話では言い切り形と同じく文節末に上昇が生じる。

(2) ヤマカ[ラ、]デ]ル。

B型の文節の直後には下降が生じる、言い換えれば動詞がB型の文節に低く接続するという特徴が各体系に認められる¹⁰。浜坂三型では下降幅が比較的小さく、北潟三型では(2)のように文節間に休止が入る発話に限られるものの、滝三型や後述の二型(4.3節参照)にははっきり現れ、また越前町小樟方言にも全く同じ特徴がみられる(新田2012: 67)。

(3) 滝三型・二型の「B型+アル」

ヤ[マガ]アル。(＜ヤ[マガ + [ア]ル)

(4) 浜坂三型の「B型+アル」

[ヤマガ!アル。(＜[ヤマガ + [ア]ル)

これをB型固有の特徴として、B型の文節末に下がり目があるとする解釈も考えられるが、アル、デルといったC型動詞側の特徴に由来する可能性なども検討する必要があり、この特徴の由来については今後の追究課題としたい。

4.2.2 文節性と系列化

N型アクセントに最も広く認められる特徴に、多くの助詞が固有のアクセントを持たず、文節がアクセント単位になるという「文節性」がある(上野善道2012: 47)。当市の三型諸体系においても、調査した限り多くの助詞(北潟方言の場合、「ガ、ヲ、ニ、デ、ノ、ハ、モ、カラ、マデ、ナラ、シカ、ダケ、グライ」)は固有のアクセントを持たず文節性を示す。

またp拍の自立語にq拍の付属語が付いたアクセントは(p+q)拍の自立語のアクセントと同じになる「系列化」(上野2012: 48)も各体系で広く成り立つ。

(5) 浜坂三型の系列化

A型：[蚊-ニ]ナラ = [ハコ]-カラ = [クル]マ-ガ = [カミ]ナリ

B型：[葉-ニ]ナラ = [ヤマ-カラ = [ナミダ-ガ = [オオカミ

C型：[芽-ニ]ナラ = [フネ-カラ = [カラス]-ガ = [ミズウ]ミ

(6) 北潟三型の系列化

A型：[蚊-ニ]ナラ = [ハコ-カラ = [クルマ]-ガ = [カミ]ナリ

¹⁰ ただし浜坂三型ではB型に高く接続する場合も可能である。

(i) ア[サガオガ]カレ]ル。(ア[サガオガ B型+カ]レ]ル A型)

(ii) [オトガ]デ]タ。～[オトガ!デ]タ。(オトガ B型+[デ]タ B型)

- B型：葉-ニナラ… = ヤマ-カラ… = ナミダ-ガ… = アサガオ…
 葉-ニナ[ラ。 = ヤマ-カ[ラ。 = ナミダ-[ガ。 = アサガ[オ。
 C型：[芽-ニナラ = [フネ-カラ = [カラス-ガ = [ミズウミ

(7) 滝三型の系列化

- A型：蚊-[ニナ]ラ = ハ[コ-カ]ラ = コ[トバ]-ガ = ニ[ワト]リ
 B型：葉-[ニナ]ラ = ヤ[マ-カ]ラ = ナ[ミダ-ガ] = ナ[デシコ
 C型：[芽-ニ]ナラ = [アユ]-カラ = [カイ]コ-ガ

4.2.3 動詞活用形のアクセント

「文節性」と「系列化」の他、N型アクセントにみられる特徴の一つに「活用形アクセントの一貫性¹¹⁾」(上野 2012: 44)があるが、あわら市のN型諸体系ではむしろ多くの場合活用形アクセントは一貫しておらず、活用形アクセントが動詞によってA型かB型かで一貫する九州二型方言と比べると複雑な様相を呈する。越前町小樟方言の音調と併せて、同市の三型諸体系の活用形アクセントを表に示す。

表 5 三型諸体系の動詞活用形アクセント

動詞の類	語例	終止・連体	否定(～ん)	タ形
2拍一段1類	着る	A(A)	A(A)	B(B)
2拍一段2類	見る	C(C)	C(C)	
2拍五段1類	置く	A(A)	A(A)	B(B)
2拍五段2類	書く	C(C)	B(B)	C(C)
「居る」類 ¹²⁾	居る	B	B	B
3拍一段1類	上げる	A(A)	A(A)	B(B)
3拍一段2類	下げる	B(B)	B(B)	C(C)
3拍五段1類	上がる	A(A)	B(A)	A(A)
3拍五段2類	下がる	B(B)	B(A)	B(B)
3拍五段3類	歩く	C(C)	B(C)	C(C)
4拍一段1類	聞こえる	A(A)	B(A)	A(A)
4拍一段2類	集める	B(B)	B(B)	B(B)
4拍一段3類	隠れる	C(C)	B(C)	C(C)

カッコ () 内は小樟方言の音調型(新田 2012 より)

¹¹⁾ 九州の二型方言では成立する特徴であるが、「本土方言・琉球方言ともに例外が多く、N型アクセントの一般特性とは見なしがたい」(上野 2012: 56)ともされる。あわら市のN型でもまた例外となるから、N型アクセントに一般的な特性と見ることへの反証を重ねることとなった。

¹²⁾ 京阪系諸体系と同様「居る」は3拍五段動詞の中で1語だけ孤立して他の語とは異なる系列に属する。

小樟方言の音調とほとんど一致するものの、3拍五段動詞と4拍一段動詞の否定形の音調に相違がみられる。小樟方言では3拍五段2類動詞の否定形がA型で現れる以外は終止形の音調と一致するが、あわら市の三型諸体系ではB型に統一される。なお滝三型においては、4拍以上の否定形はB型に加え終止形と同じ型も併用する。言い換えれば、否定形がB型も併用するという条件付きながら、3拍五段動詞や4拍一段動詞では終止連体形・否定形・タ形のアクセントが一貫するということになる。

4.3 三国式（二型）アクセント

あわら市内の調査地点中最も多い8地点では二型アクセントが確認された。そのうち7地点で確認された同市主流のアクセントとみられる体系を本稿では「主流二型」と呼称する。類別体系¹³・音声実質から見て、福井平野周辺に存在することが知られてきた「三国式」に相当するものである。また、北潟地区の南に隣接する赤尾地区に分布する、各型への所属語類は主流二型と一致するもののB型の音声実質が大きく異なる二型アクセントを「赤尾二型」と呼ぶ。

4.3.1 各体系のアクセント型

まず市内の最も広い範囲に分布する主流二型のアクセント型と、赤尾二型のアクセント型を対照する。

表 6 二型諸体系のアクセント型

主流	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍
A	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○
B	[○	○[○	○[○○	○[○○○	○[○○○○
赤尾					
A	[○]]	[○]○	○[○]○	○[○○]○	○[○○○]○
B	○	○[○	○○[○~ [○]○[○	○○○[○~ ○[○]○[○	○○○○[○~ ○[○○]○[○

A,B それぞれの型は、末位拍にかけてのピッチの下降の有無により区別される。主流二型と赤尾二型の最大の相違点はB型の音声実質にあり、主流二型のB型は、2拍目にかけてピッチが上昇し末位拍まで高い拍が続く音調であるが、赤尾二型のB型は、末位拍の直前まで低い拍が続き末位拍のみが高く卓立する音調である。またしばしば3拍以上のB型で低い拍が連続する場合それを回避するようなピッチの隆起が生じ、上表に示したような重起伏調が聴かれる。

次に、各体系の「2拍名詞+助詞+アル」の音調を挙げる。

¹³ 三型諸体系のA型とC型が合流した体系である。およそ1拍名詞：13A/2B、2拍名詞：145A/23B、3拍名詞：1467A/5B

表 7 二型諸体系の「2 拍名詞+助詞+アル」の音調

主流	2 拍	2 拍+1 拍	2 拍+2 拍	2 拍+3 拍
A	[ハ]コ。	ハ[コ]ガアル。	ハ[コナ]ラアル。	ハ[コニナ]ラアル。
B	ヤ[マ]。	ヤ[マガ]アル。	ヤ[マナラ]アル。	ヤ[マニナラ]アル。
赤尾				
A	[ハ]コ。	ハ[コ]ガアル。	ハ[コナ]ラアル。	ハ[コニナ]ラアル。
B	ヤ[マ]。	ヤマ[ガ]アル。	ヤマナ[ラ]アル。	ヤマニナ[ラ]アル。

三型諸体系と同様、二型諸体系においても B 型の文節に「アル」が低く接続する。

4.3.2 文節性と系列化

多くの助詞が固有のアクセントを持たず、文節がアクセント単位になるという「文節性」と p 拍の自立語に q 拍の付属語が付いたアクセントは(p+q)拍の自立語のアクセントと同じになる「系列化」は三型諸体系と同様認められる。

4.3.3 動詞活用形のアクセント

三型諸体系とよく対応し、基本的に 4.2.3 節の表 5 において C 型が A 型に合流している体系と見ればよい。赤尾二型では三型諸体系と同様 4 拍否定形（上がらん、聞こえん、など）がすべて B 型に統一されている一方、主流二型では 4 拍否定形の音調が終止形の音調と一致し 3 拍五段動詞と 4 拍一段動詞では各活用形のアクセントが A,B 型それぞれに一貫している。

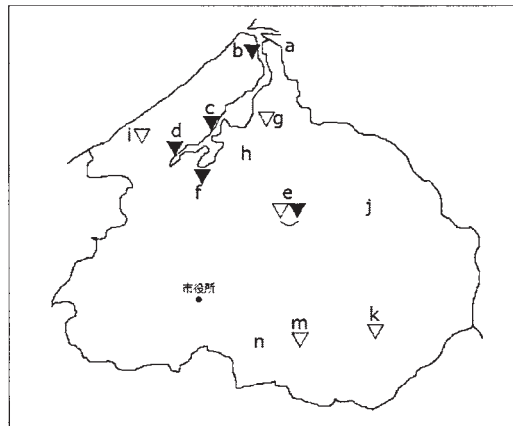


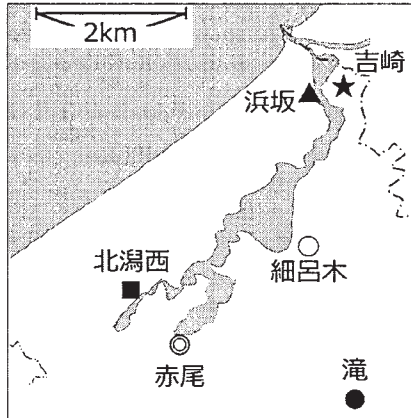
図 3 4 拍動詞否定形の音調分布

凡例： ▼…B 型に統一

▽…終止形と一致

5. 各体系の音調対照

前章では各体系を多型、三型、二型の 3 種に分類し節を分けてそれらの概要を記した。本章では体系の種類を超えて、語例を挙げながら各体系における音声実現を対照し、あわら市内のアクセント多様性をより具体的に示し、各体系の分化過程など通時的議論のための最初の足がかりになることを目指す。本稿で報告した全ての体系が集中する、北潟湖周辺を中心とした同市北西部の 6 地点を代表地点とする。



- 凡例：
- ★吉崎式 (代表地点：吉崎)
 - ▲浜坂三型 (代表地点：浜坂)
 - 北潟三型 (代表地点：北潟西)
 - 滝三型 (代表地点：滝)
 - 二型（主流） (代表地点：細呂木)
 - ◎二型（赤尾） (代表地点：赤尾)

図4 北潟湖周辺のアクセント分布

5.1 語群Aの音調対照

三型諸体系においてA型に属する語群を以下語群Aと呼称する。およそ金田一語類の1類に相当し、中央式諸方言では高起式無核に対応する語が多い。吉崎方言では分節音の条件により1核か2核または無核と様々に対応する。

表8 語群A(2,3拍)の音調対照

語群A	蚊が…	飴。 蜂。	着る。 置く。	飴が… 蜂が…	魚。 畳。	上がる。
吉崎	[○]▽	[○○ [○]○	[○]○	[○○]▽ [○]○▽	○[○○ [○○]○	[○○]○
浜坂				[○○]▽	[○○]○	[○○]○
北潟西	[○]▽	[○]○	[○]○	[○○]▽	[○○]○	[○○]○
滝				○[○]▽	○[○]○	○[○]○
細呂木						
赤尾	[○]▽	[○]○	[○]○	○[○]▽	○[○]○	○[○]○

語群Aは、基本的にピッチの下降のある音調で実現し、各地点、相互によく類似する音調を持つ。表9における浜坂・吉崎両方言の対照にあたっては、2拍目をピークにその後ゆるやかに下降する音調（[サカ!ナガ～サ[カ!ナガ(HHMM～MHMM)）が浜坂方言ではA型（[サカ]ナガ）に解釈され、吉崎方言では無核型（サ[カナガ）に解釈されるという点に注意しなければならない。音声上は全く同じであっても、音韻上は、浜坂ではB型（[ココログ(HHHH)）との対立から「下降がある型」となり、一方吉崎では2核型（[ココ]ログ(HHLL)）との対立から「(核による)下降がない型」と解釈される。

表 9 語群 A (4 拍) の音調対照

語群 A	飴なら・蜂なら…	魚が・畳が…	猪・雷。
吉崎	[○○]▽▽・[○]○▽▽	○[○○▽]*・[○○]○▽	○[○]○○・[○]○○○
浜坂	[○○]▽▽	[○○]○▽	[○○]○○
北潟西	[○○▽]▽	[○○○]▽	[○○○]○
滝	○[○▽]▽	○[○○]▽	○[○○]○
細呂木	○[○▽]▽	○[○○]▽	○[○○]○
赤尾			

*○[○!○▽ のように3拍目以降ゆるやかな下降が生じる実現も聴かれる。

5.2 語群 B の音調対照

三型諸体系において B 型に属する語群を語群 B と呼称する。金田一語類の 1 拍名詞 2 類、2 拍名詞 2・3 類、3 拍名詞 5 類、3 拍動詞 2 類などに相当し、比較的中央式アクセントの古態を残す高知市方言など中央式周縁部諸方言では高起式 1 核に対応する語が多い。吉崎方言では分節音の条件によって 1 核または 2 核で現れる。

表 10 語群 B (2, 3 拍) の音調対照

語群 B	葉が…	花。 橋。	出た。 居る。	花が… 橋が…	心。 涙。	下がる。
吉崎	[○]▽	[○]○	[○]○	[○○]▽ [○]○▽	[○○]○ [○]○○	[○○]○
浜坂	[○▽	[○○	[○○	[○○▽	[○○○	[○○○
北潟西	○▽	○[○	○[○	○○▽	○○[○	○○[○
滝	○[○▽	○[○	○[○	○[○▽	○[○○	○[○○
細呂木	○[○▽	○[○	○[○	○[○▽	○[○○	○[○○
赤尾				○○[▽	○○[○	○○[○

表 11 語群 B (4 拍) の音調対照

語群 B	花なら・橋なら…	心が・涙が…	朝顔・狼。
吉崎	[○○]▽▽・[○]○▽▽	[○○]○▽・[○]○○▽	○[○]○○・[○]○○○
浜坂	[○○▽▽	[○○○▽	[○○○○
北潟西	○○▽▽	○○○▽	○○○[○
滝	○[○▽▽	○[○○▽	○[○○○・[○○○○
細呂木	○[○▽▽	○[○○▽	○[○○○・[○○○○
赤尾	○○▽[▽	○○○[▽	○○○[○

語群 B は、吉崎方言で 1,2 拍目に下降が生じる音調で現れる一方、N 型諸方言ではピッチの上昇位置は様々であるもののピッチの下降が文節内部(語内部)にはない音調で一致して現れ、音声上非常に大きな差異がある。

5.3 語群 C の音調対照

三型諸体系において C 型に属する語群を語群 C と呼称する。金田一語類の 1 拍名詞 3 類、2 拍名詞 4・5 類、3 拍名詞 6・7 類、3 拍五段動詞 3 類などに相当し、中央式諸方言では低起式に対応する語が多い。吉崎方言では無核に対応する。

表 12 語群 C (2, 3 拍) の音調対照

語群 C	絵が…	窓。 鮎。	出る。 書く。	窓が… 鮎が…	親子。 左。	歩く。
吉崎	[○▽	○[○	○[○	○[○▽	○[○○	○[○○
浜坂	[○]▽	[○]○	[○]○	[○○]▽	[○○]○	[○○]○
北潟西	[○▽	[○○	[○○	[○○▽	[○○○	[○○○
滝	[○]▽	[○]○	[○]○	○[○]▽ [○]○▽	○[○]○	[○]○○
細呂木 赤尾	[○]▽	[○]○	[○]○	○[○]▽	○[○]○	○[○]○

表 13 語群 C (4 拍) の音調対照

語群 C	窓なら・鮎なら…	親子が・左が…	甘酒。
吉崎	○[○▽▽*	○[○○▽*	○[○○○*
浜坂	[○○▽]▽	[○○○]▽	[○○○]○
北潟西	[○○▽▽	[○○○▽	[○○○○
滝	○[○]▽▽・[○○]▽▽	○[○]○▽	○[○○]○(A)
細呂木 赤尾	○[○▽]▽	○[○○]▽	○[○○]○

* ○[○!○▽ のように 3 拍目以降ゆるやかな下降が生じる実現も聴かれる。

語群 C の音調も地点差が大きい。大きなピッチの下降が生じない吉崎・北潟西方言と、下降が生じるその他に大別でき、さらに下降位置に関して、語頭付近に固定される滝方言と、文節末(語末)付近に固定される浜坂・細呂木・赤尾方言に分類できる。

6. まとめ・研究の展望

本稿では、福井県あわら市のアクセント分布と体系の概要を報告した。無アクセント地域が広いと考えられてきた福井平野周辺においてもある程度まとまったN型アクセントの分布域が存在すること、アクセントの地域差が激しく、これまでに報告のなかった新種を含む多様な体系が複雑に分布することを明らかにした。依然、各体系の概要を把握したに過ぎず、今後もさらに調査を続け各体系の詳細を明らかにする必要がある。また、あわら市を含む福井平野周辺地域において多地点調査を展開し、この地域のアクセント分布を今一度確認し直す必要もあるだろう。

多様なN型が存在することから、自ずとそれらの系統関係にも関心が持たれる。現時点において、二型は三型から型の対立数を1つ減らして成立したものであるとは容易に推定できる一方¹⁴、隣接する石川県加賀地方の多型諸体系と3種類の三型アクセントとの間の系統関係の解明は難題である。まずは吉崎方言など周辺多型諸体系の音調を考慮に入れつつ、N型諸体系内部の系統関係を整理し、N型祖体系を再建することが必要であろう。

参考文献

- 上野善道(2012)「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京: 塙書房.
 金田一春彦(1975)『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』東京: 教育出版.
 中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版.
 新田哲夫(2012)「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16(1): 63-79.
 平山輝男(1953)「福井県嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83: 1-4.
 山口幸洋(1999)「福井一型アクセント百人調査(1)」『名古屋・方言研究会会報』16: 11-36.
 山口幸洋(2000)「福井一型アクセント百人調査(2)」『名古屋・方言研究会会報』17: 49-73.

¹⁴ ただしあわら市の二型諸体系が浜坂三型と滝三型のどちらから発生したのかを証明するためには様々な点の精査を要する。主流タイプの二型が生じる過程として、滝三型のC型がA型に合流したとも、浜坂三型のA型がC型に合流したとも想定することができる。系統上一度浜坂三型と滝三型に分岐した後で、各三型が二型化するとそれぞれ独立に全く同じ体系を生じる可能性があるということである。

Distribution of Accent Systems in Awara City, Fukui Pref.

MATSUKURA Kohei

sealulling@gmail.com

Keywords: N-pattern accent, 3-pattern accent, 2-pattern accent, Mikuni type,
Japanese accent, Awara dialects, Kitagata dialect

Abstract

In Awara city, Fukui Prefecture, no thorough investigations of accent systems have been made, and neither their distribution nor their details have been revealed until today. The author conducted fieldwork and found out that N-pattern accent systems were distributed in almost the whole area of the city. 2-pattern accent systems, known as “Mikuni type,” are widespread in the city, especially in the southern part, and three kinds of 3-pattern accent systems which differ substantially from each other in their tonal realization are distributed in the northern part, particularly around Lake Kitagata. In addition to various N-pattern systems, a multiple-pattern system similar to those in the Kaga region of Ishikawa Prefecture was found by Lake Kitagata. In this paper, the author reports the outlines and distribution of various accent systems found in the city.

(まつくら・こうへい 東京大学大学院修士課程)